

門脇 英晴氏

日本総合研究所 特別顧問

#136



紹介者



若月 三喜雄氏
アクサ生命保険 取締役会長

経済同友会が主催する「日本・ASEAN経営者会議」が今年も11月初旬ブルネイで開催されますが、民間主導でASEAN友好に視点を置いた活動は、ユニークで且つ極めて貴重なものと考えます。

最近、日本の関心もつばら中国やインドに注がれ、ASEANの影が薄れる一方、経済停滞が続く日本へのASEAN側の期待が低下していることが気になります。しかし、とりわけ中国の存在が大きくなる

程、日本とASEANの関係はますます重要となります。ASEANの経済人からも、中国の巨大なマーケットの魅力は圧倒的だが呑み込まれる恐怖もあり、日本にバランスになってほしいという本音も聞こえてきます。中国政府による国威発揚の場と化した北京オリンピックが彼等の本音にどのような影響を与えたのか誠に興味深いものがあります。

そもそも日本は戦後、ASEAN各国が独立を果たすにつれて、政治的にも経済的にも密接な関係を築いてきました。日本のASEANへの直接投資は、2007年末残高6兆9496億円と、対中国直接投資残高4兆2756億円をはるかに上回る水準にあります。日本はこの地域の最大のリスクテイカーである自覚を忘れてはなりません。ASEAN側もアジア経済危機を克服して発展し、日本と中国を競わせる力を持ち始めました。しかし、域内には異なる政治体制が存在することや経済格差がますます拡大するなど、内部に数々の矛盾を抱えています。これらの解決の為に、経済的な力があり且つ平和的民主主義国家である日本

次回

山下 徹氏

(NTTデータ 取締役社長)

にご登場いただきます。

ASEANへの想い

の協力が最適であることは国際的にも明白です。

ところでASEAN各国を訪れる度に最も感慨深いのは、日本の過去が各国の人々の寛容の心の中に受け止められているように思われることです。これは、中国や韓国との大きな違いです。だからこそ、今後の中国や韓国との複雑な関係、さらには東アジア共同体の道筋から見て、ASEANの帰趨は極めて重要です。日本はすでにASEANとの関係が新しいステージに入ったことを認識して、より強固な信頼関係を築くべき必要に迫られています。